アイランドキャンパス事業成果報告書・提言書

2010、10，31

文責代表者　清　眞人（近畿大学文芸学部・文化学科教授）

はじめに

われわれ近畿大学文芸学部の４つのゼミ（文化学科の清眞人ゼミ、藤井弘章ゼミ、上田貴子ゼミ、芸術学科の上田順康ゼミ）は2010年の夏、鹿児島県離島振興事業の「アイランドキャンパス事業」に応募し、奄美大島瀬戸内町で「近畿大学文芸学部夏学校 in　奄美」を開催した。現地での開催期間は９月１日から９月10日までであった。このプロジェクトの全体は次の三つのプロジェクト、Ａグループ「学生自身によるエコツアー企画立案」、Ｂグループ「聞き書き調査実地体験」、Ｃグループ「ケンムン伝説をアートする」によって構成された。また、このプロジェクトは、今後毎年行うことを予定している「夏学校 in　奄美」の第一歩を切り開くパイロット事業として位置づけられた。「夏学校 in　奄美」は、大都市青年と奄美大島を繋ぐエコツアー的架け橋、民俗学や歴史研究、奄美を主題にしたアート活動、この三本柱を打ち立てることで、奄美と大都市青年を繋ぐ互恵的な新たな文化交流スタイルを実現する試みとして構想されている。

Ａグループ「学生自身によるエコツアー企画立案」に参加したのは、清教授と清ゼミの学生、総計13名であった。Ｂグループ「聞き書き調査実地体験」に参加したのは、上田准教授と藤井ゼミと上田ゼミの学生、総計14名であった。Ｃグループ「ケンムン伝説をアートする」に参加したのは上田准教授と上田ゼミの学生、総計14名であった。（いずれも延べ人数）

この事業で利用させていただいた公共施設は以下の施設であった。清水運動体育館。清水公民館。瀬戸内町郷土館。於斉公民館。生間公民館。古仁屋公民館。海の駅ホール。

また事業の遂行にあたっては、公共施設の利用等を含め、瀬戸内町役場企画課に大変お世話になった。

参加者名簿

Ａグループ「学生自身によるエコツアー企画立案」

教員　清眞人

学生　４回生：石井智子・川谷麻季・古川あゆみ・浪江有里・紀平亮・小森将平、３回生：鍛冶あゆみ・上角麻衣・田中香織・木村太郎・小林正弥・高田淳一郎

Ｂグループ「聞き書き調査実地体験」

教員　上田貴子

学生　４回生　木村有希・大歳恭子・三田村咲子・浦田一・佐藤寛士・本並宏修・松本直樹・正木宏治、３回生　杉山未来・牛尾成広・山下洋平・奥村芙美・向尾美香

Ｃグループ「ケンムン伝説をアートする」

教員　上田順康

学生　３回生：内海杏里紗・大川理可・大谷有加・関仁美・田坂早・、２回生：佐近麻友子・谷村仁美、１回生：井坂光之介・岩城瑛士・長村江見子・為広渓・西優太郎・平松めい

I.　奄美大島での活動

1日　Ｃグループがフェリーとバスを乗り継ぎ、夕方瀬戸内町清水の宿泊所とする民宿ユートピアに到着。清水運動体育館に陶芸制作スペースを設営し、翌日からの作業準備をおこなう。また陶芸窯を利用させていただく「こんぶち陶房」を訪問する。

2日　Ａ・Ｂグループ奄美空港に到着後、あやまる岬を見学後、貸切バスで瀬戸内町清水の宿泊所とする民宿ユートピアに到着。Ｃグループは午前９時より清水体育館にて粘土による「ケンムン」の制作をする。夜７時より、Ａ・Ｂ・Ｃ全グループが合同して、清水公民館にて、義永秀三氏を講師として招き、講演会「奄美のシマグチにうつしだされる奄美の魂」をひらく。

3日　午前中Ａグループは４グループに分かれ、清水に済む里、藤井、円山、三井の諸氏を訪問し、奄美で暮らす魅力、各氏の人生観や経験、等について懇談する。Ｂグループは郷土館訪問を訪問し、奄美での民俗学的調査や聞書きの仕方などについて学芸員の町健二氏と懇談し、さまざまな助言を受ける。午後、貸切海上タクシーにてＡ・Ｂグループは於斉公民館に移動する。翌日まで公民館に一泊し、加計呂麻島を探訪する。
Ｃグループは午前中、清水体育館で「ケンムン」の制作をし、午後から生間公民館に移り、村民と「ケンムンＴシャツづくりワークショップ」をおこない、夕方に徳浜の自然塩工房を訪問し、翌日まで生間公民館に宿泊する。

4日　午後瀬相からフェリーで清水に戻る。Ｃグループは田中一村美術館、あやまる岬等を見学に行く。夕方より、清水の円山勝二さん以下の青年たちとバーベキュー交流会を開く。この交流会にはＡ・Ｂ・Ｃ全グループが参加する。当初予定していた青年たちの交流海遊びは台風余波で荒れているので中止する。

5日　午前　奄美博物館館長中山清美氏を講師に招いて、講演会「奄美のケンムン」を開く。これにはＡ・Ｂ・Ｃ全グループが参加する。
Ａ・Ｂグループは徳浜に午後移動する予定であったが、台風余波のため、徳浜一泊探訪は中止する。夜、有志は、古仁屋のライブハウス「マッチボックス」でライブを開き、古仁屋の阿音楽好きの人々と交流する。

6日　午後　Ａ・Ｂグループは貸切バスで住用の奄美アイランドにある「原野農業博物館」を探訪する。また夜は、古仁屋公民館で「古仁屋八月踊り芸能保存会」の富島甫氏の講演を受けたうえで、保存会の人々と、歌・踊りをまじえ交流会をもつ。Ｃグループは粘土で制作した「ケンムン」をこんぶち陶房で一日かけて焼成する。

7日　午前、Ａ・Ｂグループは午後の成果発表会に向けて準備。午後　古仁屋公民館にて、Ａグループ「学生自身によるエコツアー企画立案」、Ｂグループ「聞き書き調査実地体験」、それぞれの成果発表会を開く。瀬戸内町役場企画課、瀬戸内観光協会、コンブチの藤井氏などのみなさんから感想や意見を聞かせていただく。Ｃグループは加計呂麻島に渡り、一日島内探訪する。

8日　A・Bグループは住用のマングローブ公園で遊んでから、帰路につく。
Cグループは、午前、こんぶち陶房で作品の窯出しをする。午後、海釣りを体験する。
9日　Cグループは「ケンムンアート展」を海の駅ホールで開催する。多くの市民との交流が生まれる。

10日　Cグループは金属アクセサリー作家のアトリエ、奄美市博物館見学、ハブセンターを見学し帰路につく。

11. 近畿大学での展示

10月18日～10月22日
近畿大学文芸学部校舎（A館）二階の廊下ギャラリーにて
「アイランドキャンパス　夏学校 in 奄美」展示会を開く。

この展示には、奄美で制作したケンムンTシャツと、写真が展示された。
またパンフレット「こんな奄美エコツアーを提案します」と「奄美大島聞書き民俗調査実地体験報告集」が編集発行され、配布された。(別紙添付)

また上記のパンフレットとは別に参加学生によって以下の報告集がつくられた。

奄美で私が出会ったもの

満天の星空と出会う

私が奄美に来て一番印象に残っていることは、星の数の多さです。私の地元は大阪ですが、建物の明かりや街灯で空が明るく、星がほとんど見えません。奄美に来て最初の夜、空を見上げてびっくりしました。空は真っ暗で360度どこを見ても星があり、視力の悪い私でも星の色やまたたきがみえたからです。加計呂麻島までは流れ星を見ることもでき、本当に貴重な体験ができました。大阪にいるときはあまり空を見ませんが、奄美にいるとついつい空を見てしまいます。それほど都会の人間にとって奄美の星空は魅力的なものなのだと思います。

もうひとつ、奄美に来て感動したことがあります。それは海がとてもきれいなことです。そして浜辺には必ず貝殻が落ちていることにも驚きました。都会の海はとても汚く、浜辺に打ち上げられているものと言えば、海藻とゴミばかり。そのような海しか見たことのない私にとっては、奄美の海は本当に美しく、そしていつまでもこのままの状態で残してほしいと思える海でした。奄美に住んでいる方からすれば当たり前のことかもしれません。ですが都会から来た人間にとっては、本当に素晴らしい海なのだということを忘れないでほしいです。

今挙げたもの以外にも、奄美には都会にない魅力的なものがたくさんありました。大阪に帰ったら家族や友達にそれを伝えたいです。

今回は台風の影響で雨の日に何日かぶつかってしまいました。雨の日用のプランも考えておく必要を痛感しました。具体的な案としては、芸術コースの人達がユートピアの方に教わりながら、貝殻などを使って写真立てをデコレーションしていたので、それなら雨の日でもでき、民宿の方とも親睦を深めることができるのでよいのではないかと思っていま

す。またカフェこんぶち横の陶芸教室に参加するのもよいのではないでしょうか。(M.J)

生き物に満ちた自然と出会う

私は奄美大島に滞在して、自然の素晴らしさを知ることができました。奄美大島では、都会では決して見ることのできないありのままの自然を見ることができます。見ているだけで心が穏やかになるようなエメラルドブルーの海、周りを取り囲む緑の山々、夜空に輝く満点の星。全てが地元の大阪では体験のできないことでした。

その中で私が特に驚いたのは様々な生き物と出会えることです。海では白、黒、青、黄など、色とりどりの魚が泳いでおり、浜辺ではカニやヤドカリがせわしなく動いていました。また、山では、不気味な色をした蝶や蛾がヒラヒラと舞い、カラフルな日本トカゲや絶滅危惧種とされている木登りトカゲも見ることができました。

都会に住んでいると図鑑でしか見ることのできない生き物を実際にこの目で見ることができることが奄美大島の魅力だと私は思います。

自然と接する機会が少なくなってしまった現代の人間にとって、生き物と触れ合うことの大切さを知る良い経験になるのではないでしょうか。奄美大島のエコツアーを企画するのなら、生き物と触れ合うことのできるようなイベントを盛り込んでみるときっと面白いと思います。(M.K)

円山さんに出会う

私たちが泊らせてもらっている清水にある民宿ユートピアの主人、円山さんに自身が経営している養鶏場について話を聞かせてもらった。彼は公務員の三年の定年を残して民宿を始めたわけだが、民宿だけでは自給自足に苦しむそうだ。そこで養鶏場を建設し、アヒル、チャボ、ニワトリ、ドラゴンフルーツ、バナナ、パパイヤなどを育て、収穫した卵やフルーツを売ることでそれを副業として生計を立てているそうだ。奄美大島のような自然に溢れた土地で、"何をできるのか"ということを考えながら知恵を絞って生活しているのだなあと感心せざるを得なかった。

一日二回朝、昼に餌やりを兼ねて見回りに行くらしいが、最近はカラス被害が多く困っているそうだ。こういったところに自然であることの弊害が出てくるのだなあと思った。将来は三男の方と協力してこの養鶏場を農園にするのが夢らしい。円山さん本人もおっしゃっていたが、毎日が楽しくて将来はこうしたいという夢のある生活がうらやましく感じた。

養鶏場で収穫した卵は、売却する以外に民宿でお客さんにもてなす鶏飯にも用いているそうだ。鶏飯とは白飯に鶏で取った出汁をかけて、その上に卵、鶏のささみ、しいたけ、ねぎ、きざみのり、柑橘類の皮を乗せた奄美大島伝統の食べ物である。柑橘が程良いアクセントになり、とても食べやすいあっさりとしたおいしい食べ物になっている。

奄美大島は言うまでもなく自然が素晴らしく圧倒される。都会に疲れ、ちょっと一息したい、デジタルな世界から離れ存分にゆっくりしたい、そんなあなたにぜひ奄美大島をおすすめします。もちろんアクティブな方にもぴったりな場所です。海で泳ぐもよし、カヌーを体験するもよし、山で珍しい生き物を探すもよし。また奄美の人たちはその土地柄もあり、すごく温かい方が多いです。現地の方たちと和やかに時間を忘れておしゃべりするのも旅の醍醐味です。奄美大島、そして清水に来る機会があればぜひとも民宿ユートピアに宿泊し、アットホームな空気に包まれながら、おいしい鶏飯を食べ、そして最高の自然を満喫すると良いでしょう。(J.T)

ゆっくりと流れる時間に出会う

私が大阪にいた時はすごく一日があっという間でした。朝起きて、ご飯を食べて、バイトいったり、友達と遊んだり、これはこれで楽しいのですが、思えばいくつかのパターンの繰り返しで、八月中何をしていたかと聞かれると、家族旅行という大イベント以外の日常の生活はあまり覚えていません。せわしなく動いてはいるけれど、あまり記憶には残ってないなと感じます。

しかし、九月になり、この奄美大島に来てすごく時間がゆっくり流れているなと感じました。都会では時間にしばられていたのが、ここにきたら、時間にしばられない生活、これが大きな違いだなと思います。

また、この島で出会った喫茶店、喫茶店なら大阪にもあるんですが、この喫茶店は大阪のものとは少し違うのです。音楽が流れていなくて、マスターとの会話や窓のそとの風景をながめたり、とても静かで自分を見つめ直したり、考え事をするのに最適でした。もちろん大阪でも考え事はできますが、このように家以外でゆったりと自分の時間を過ごすのは難しいと思います。毎日ゆったりばかりはしていられないけど、こういう風に自分を見つめ直す時間をもつのは大事だと思うし、多くの人がそのことを忘れがちだと思います。せわしなく生活している大阪の友達にこの奄美大島のしばられない時間の流れを知ってもらいたいです。(A.K)

島時間に出会う

私の出会った奄美の人々はみなさん楽しそうで、生活に満足しているんだなぁと感じられた。島での暮らしは、都会に慣れ親しんだ私たちにとってはお世辞にも便利とは言えない。それでも彼らはとても楽しそうだった。

当然ながら、島といえど奄美大島には 7 万人の人間が暮らしており、当然普通の社会生活が行われている。しかし、美しい環境の魅力に負けるのか、役所仕事をやめてしまう人もいる。私たちが出会った人々、コンブチという名の喫茶店の店長であったり、ウィンドサーフィンを趣味にするおじさん、歓迎のバーベキューを開いてくれた人たち。みなそれぞれが、島独特の空気をまとっている。

島時間という言葉があると教わった。それは島に流れるゆったりとした時間の流れのことをいうらしい。時間の流れ方が早いとか遅いとかではなく、流れ方が静かというか、言葉では表現しづらいのではあるが、都会を流れる空気とは、その密度が違うような気がわたしには感じられた。

ただ海辺を散歩しているだけで、イヤホンで耳を塞がずとも、波の音が、風の音がして、飽きさせない。気づけば時間が過ぎている。それを時間を無駄にしたという気持ちにさせない、時間の流れ。

もしかしたら、奄美大島に来たという環境の変化や、海や山の珍しさ、その過ごしやすい環境に私たちが目新しさを感じているだけなのかもしれない。長旅の疲れが、そういう時間を必要としたのかもしれない。それでも、そんな気持ちを満足させる環境の美しさには目を見張るものがある。その時、私たちは確かに島時間に触れているのではないだろうか。(T.K)

現実から離脱できる時間に出会う

私が感じた奄美の魅力は、現実世界から離れている独特の雰囲気です。私はこれまで国

内の様々なところへ旅行してきましたが、奄美では、北海道とも沖縄ともまた違う、神聖とも言えるような独特の雰囲気を感じることが出来ました。奄美の人から霊の話や妖怪ケンムンの話を聞けば、普段都会で忙しい生活を送っていると考える機会がない死後の世界について考えさせられます。また、奄美では自給自作をしている人が多いので、民宿など宿主の生活の様子を感じられるようなところで時間を過ごし、田畑で働く人々を見ていると、自分が口にしているものは自然が作り出したものなんだということに改めて気付きます。当たり前のことなのですが、人間が生きていくには自然が必要なんだということをひしひしと感じることが出来ます。

島での時間はゆっくり流れています。私は沖縄旅行に行ったこともあるのですが、沖縄では車のスピードぐらいでしか島のゆっくりした時間を感じることはできませんでした。それはきっと、沖縄には自然も多いですが、観光向けの施設が多く、観光客も多いからだと思います。国際通りなど、沖縄の有名どころには観光客を相手することに慣れた島の人々がいます。それはそれで、観光に来た！という感じがして楽しいのですが、島に来たという実感を得ることはなかなか出来ないように思います。一方、奄美では時間がゆっくり過ぎていくのを実感することが出来ました。観光客用に整備された施設が少ない代わりに、本州では見られないような自然のありのままの姿を見ることが出来ます。そして、観光客向けのスポットが少ないため、人々も島独特のカラーを残したままであるように感じました。島も人も、変に観光客向けになっていないため、奄美の島自体をそのまま感じることが出来ました。

また、奄美に居る間、本州での現実世界を忘れることが出来ます。奄美で過ごすのんびりした時間の中に居ることで、普段いかに自分が時間に縛られて生活していたかが分かります。夜の奄美の空いっぱいの星を見ていたら、綺麗という想いだけじゃなく、自然の不思議、生命の不思議について考えさせられました。星空が私にとって一番印象的な奄美の景色です。時間に縛られて生活していると視野が狭くなりがちですが、奄美でののんびりした時間では視野が広がります。普段の生活では大きく思えた悩み事も、大きな自然を感じていると小さなものに思えてきます。私は今まで、観光を主とした旅行にばかり行ってきたのですが、今回初めて奄美に行き、自然を全身で感じる旅行を通して、心に余裕が持てるようになりました。訪れることでこんなにも心境の変化が起きる場所ってあんまりないと思います。(K.T)

二つの異なる世界のあいだに身を置くことの魅力に出会う

空は雲で隠れ風が肌を押し出すかのように吹き寄せる。海は荒れ波が押し寄せ青をにごらせ山の緑を包むかの勢いでした。つまりは嵐、清ゼミの雨男と藤井ゼミの雨女がタッグを結び最高の悪天候が実現しました。途中で二人が帰った後の夕焼けがたいそう綺麗だったと頂いた写真が本当に綺麗で切なくなりました。

自然のことは運任せでついてないと思う反面、人の思考や感情をものともしない暴れるような嵐に改めて自然のエネルギーをこの身に感じました。美しい自然、そんな当たり前な言葉の現実とはまさに諸刃の刃で青い空はスコールを呼び心地よい波音が船をも飲み込む悪魔へと変わり心やすらぐ山の緑がハブやイノシシといった人外の脅威を生み出す、のどかな島の暮らしは自然に支えられている反面自然との闘いであると思いました。

そんな自然のエネルギーに負けない生命のエネルギーを持つのが奄美に住む人達です。彼らのその活力の源、それは島が持つ独自の"時間軸"にあるのではないかと考えました。僕達本土の人間が時間を短く短縮して効率よく生きていこうとするのに対して、島の人達

は時間の流れに乗るようにして生きているように感じまし た。生き急いでいる、島の暮らしに身を置いて自分自身の生活を思うとそう感じました。これは本土の暮らしがよくない、島の価値観が正しいという話ではありません。ただゆっくりとした時間の中で考え、話し、孤独をし、歩き、走り、目を閉じ、目を開くことが、人には、というより生物にはあるべき時間なのではないか、そう思ったりもしました。

そうは言っても僕自身は島時間を満喫するにはまだ若く、じれったさを感じることも度々ありました。つまりはそういった様々な環境への選択肢があるということが大切なのではないか、そう思います。本土の中の物に恵まれた、全てがオリジナルな世界とは異なる世界、他方奄美で出会うありのままの自然とそこに住む人のエネルギー、その両方を見出せる環境をもつことが、双方の良さを感じられ自己の感受性を高めることにも繋がるのではないかと思います。(S,K)

人の温かさに出会う島、奄美

わたしが初めて奄美に行ったとき、まず感じたことは、とにかく海や星がきれいで、自然がそのまま残されている、ということでした。透明な水から奥に行くにつれて水色、青色になっていくという、こんなにきれいなグラデーションの海を奄美に来るまでは実際に見たことがなかったし、地元では肉眼では見ることのできなかった星が本当はこんなにたくさんあったんだ、ということをすごく感じることができました。

今回二回目の奄美では、台風による雨で、去年のようにいろんな体験はあまりできませんでしたが、奄美に住んでいる方からお話を聞く機会がたくさんありました。お宅に訪問させていただいたり、講演をしにきていただいたり、また、いろんな場で出会った方々がすごく気さくに話しかけてくれたりもしました。そういったなかで、奄美の人はすごく温かいなということを感じました。

地元ではあまり近所づきあいなどがなくなってきていて、近くに住んでいてもほとんどお互い言葉をかわすことは少なくなっています。でも、奄美の人々は、八月踊りなどの行事ではみんな一緒に踊って楽しみ、何かあれば近所どうしで助け合う、というように、本当に人と人との関わりあいを大切にしているんだなと感じました。

わたしが去年初めて奄美に行く前は、楽しみな気持ちももちろんありましたが、離島で文化も少し違う場所ということで不安のほうが大きかったです。でも実際に行ってみると、本当に奄美の人は優しくて温かくて、何度も親切にしていただいたし、いろんな方がすごく気さくに話しかけてくださって、そういった点での不安がだんだんなくなっていきました。わたしたちが大阪での生活と比べると、やっぱり不便なんじゃないかなと感じることも、奄美の人たちは、ないものは自分たちで作っていく、自分たちの力で暮らしていく、というふうに、すごくそれを楽しみながら奄美で暮らしているんだなと感じました。

だから、これから奄美を訪れる人には、きれいな海や星、自然を感じてほしいし、奄美の人とたくさん会って、たくさん話す機会を作ってほしいなと思います。(A.F)

踊りを愛し、唄を愛し、人を愛する、奄美の魂に触れる

今回奄美大島を訪れたのは２回目となりますが、何度行ってもやはり時間がゆっくりと流れていて、海や山、美味しい料理に恵まれた素晴らしい島である事を改めて感じる事が出来ました。なぜなら、１度目の時は初めて訪れたのもあり、体験してみたい事ばかりが先走り、全日とも太陽が私達を迎えてくれていたので、沢山の予定を詰めて朝は早くから起き、毎日どこかへ出掛けていました。でも、今回は台風が来ていた為に、外へ出られな

かったことから、民宿でゆっくり時間を過ごす事が多かったので、島時間をより感じる事が出来、また、島人の方々と多く話す時間を取ることが出来たことから、上記のテーマに沿って述べていきたいと思います。

まず、島人が住む奄美の魅力を私が感じた視点から３つ項目を上げ、振り返りたいと思います。

① １年の半分を踊りに費やす位、踊りを愛してやまない奄美の人々は“踊り”という文化を通じて自然と人と人との心もつないできたのではないか。
② 島唄文化が強い土地柄もあり、島人皆歌が上手い人達ばかりだなぁと感じた。
③ 困っている人を決して見放さない人々の温かさに触れることが出来た。

この３つが島人と出会い、話をしたりする中で私が感じた奄美の魅力でした。ただ、その一方で島ならではの問題点も存在し、例えばハブが大量発生しているとの忠告があるにも関わらず、病院には先生が常に待機している訳ではなかったり、奄美では女性が多い島ですが、出産時に緊急事態が起こってしまうとヘリコプターを使って県立病院や国立病院に行くしかない為、島であり、県負担ではあるが、莫大な資金がかかることから妊婦さんは産む事に不安も感じてしまうという話を聞きました。しかし、そんな困難さがありながらも、島人が楽しく暮らしている様に感じ取れるのは、根本に島の人の温かさと、助け合う気持ちを皆が持っているからこそだと強く感じました。そして、島人は人と人との出会いも大切にしている様に感じ、私自身、近畿大学に入り、清先生と出会えた事でこうして２度も奄美を訪れる事が出来、沢山の友人がいてくれたおかげで一緒に貴重な経験をすることが出来たのだと感謝しています。ですので、私も今まで出会った人、これから出会う人々との関係を大切にし、この経験、思いを伝えていくことで、もっと、奄美の文化を多くの人に知って欲しいと思います。

上記のことから、今回のエコツアー企画に向けてとしては、里さんから神社があってもお参りに行く人は減ってしまっているという現状も聞いたので、私はこれまで福娘をしたり、何かを始める時や、不安な時には神社へ行ってお参りをしてきた位、神社とは縁がある様に感じていることから、奄美の人が好きな踊りを活かした「夏のお祭りイベント」を組み込んだツアーを計画していけたら良いのではないかと考えました。派手にしようと思うと資金が多く必要になりますが、元々あるものを活かしてのイベントなら、まだ気持ちは手軽に出来るのではないかと私は思っています。島人には商売気のない方が多いと聞いたので、それが島人の良さでもあるとも思ったのですが、こんなに素晴らしい島の魅力をもっともっと沢山の人に知ってもらい、島の伝統を若者に伝えていく為にも、少しの観光地としての発展も必要になるのではないかと感じています。（Y.N）

奄美体験のポイント

★自然(恐怖も含めたありのままの自然)
　満点の星空、流れ星
　青くて澄んだ海、ゴーグルで見ると魚がいっぱい
　夜の波音を聞いているときの怖さ
　いろんな虫が見れる
　台風で大荒れの海、迫って来る怖さ
★島の人

困っているとすぐ助けてくれる島の人
榊さんや里さんの親しみやすさ
円山さんの熱さ、奥さんの優しさ
島の若い人たちのノリのよさ
よそ者(私たち)をありのままに受け入れてくれる
みんな奄美のことが好き
第二の人生を送る人が多い

★体験
サトウキビがさまざまな工程を経て黒糖になるものづくりのたのしさ
奄美の海水で出来る塩の美味しさを実感、普通に売っている塩との甘さの違い
八月おどりを一緒に踊る楽しさ
海釣りで自分で釣った魚を調理してもらって食べた時の美味しさに感動したこと
夜の海辺で夜光虫(海ボタル)を見つける楽しさ

◎これらのことをエコツアーにするには…
学生を狙った体験型のプラン
地元の人との絡みを入れる(黒糖づくりや八月踊りのような)
また来たい、会いたいと思ってもらえるように地元の人との繋がりをつくる(里さん、榊さん、円山家のような)
全体を通して奄美特有の“島時間”を感じてもらえるようなプランを考える
島時間を感じ奄美の雰囲気を感じ取ってもらえるようになれば何度も行きたいと思ってもらえるはず！ (M.K)

三度目ならではの話——徳浜

私が奄美大島を訪れたのは今回で三度目です。島の地理関係もだいぶ分かってきました。初めて来たときは、満天の星空や海の青さに驚き、黒糖作りなどのおもしろい体験をたくさんさせてもらいました。二度目は参加人数が増え、みんなと楽しい時間を共有し、島の人とも親交が深くなっていきました。今回は比較的のんびりした時間を過ごし、島時間というものを感じ取ることができ大満足です。

さて、今から書くのは、カケロマ徳浜での体験と、そこで出会った「塩爺」こと「榊藤光さん」についてです。せっかくなので、みんなが体験できていない三度目ならではの話をと思いこのテーマにします。

初めてのカケロマは、まず徳浜へ向かいました。榊さんの塩工房を訪れるためです。先生から聞いていたとおり、気さくなおもしろいおっちゃんが迎えてくれました。
工房は想像していたより大きくなく、こじんまりとした印象を受けました。着いて早速、珊瑚から作られた、できたての塩を食べさしてもらいました。感想は「塩だけで美味しい！」です。しょっぱさや辛さの中に甘みがあり驚きました。お土産に買って帰ると、家族みんなも、この「さんご塩」のファンになり、今も購入しているほどです。
浜にいたのは私たちだけで、写真のようなエメラルドグリーンの海を独り占めしました。デイゴ並木やガジュマルの木、寅さんの映画の撮影舞台、戦争の跡地、いくつかの観光地も巡りました。ガジュマルの木はあっぱれです。大きく、太く、ねじれ、生命力を感じました。デイゴの赤い花はまだ見られていないので、ぜひ見たいです。

二回目は少し歴史に触れました。平資盛が祭られている神社を訪れ、そこで榊さんから

平家伝説を聞きました。木の生い茂った静かな神社で聞くその話からは、なんだかぞくぞくわくわくさせるおもしろさがあり、不思議な気持ちになりました。日本歴史が好きな人には是非訪れて欲しい場所です。
夜のメインイベントが、徳浜の海辺で、星空の下テントをはって寝る。というものでした。なんとも見事な三百六十度星まみれ。「まみれ」という言葉はあまり良い感じがしないので、満天の星空と言いましょう。流れ星もたくさん見ました。波の音と、キラキラと星で埋め尽くされた空、あの空間は一生忘れません。
砂をうまくデコレイトして、体にフィットする寝床をつくり、就寝しました。

３回目は、台風の関係でカケロマを満喫することができませんでしたが、私と、同じく奄美３度目の友達と２人、少しだけ徳浜を訪ね、榊さんに会いました。
塩工房のそばの海は悪天候で荒れ、以前見た穏やかで青くキレイなものとは違う姿をしていました。空は暗く、風は強く、波は高く激しく、すさまじい勢いでこっちにどんどん迫ってきます。自然の驚異というものを肌で感じました。心臓の奥がぎゅっと怖がっているのが分かりました。自然には絶対逆らえないので、塩作りに使うポンプが流されていましたが、海のおもちゃにされるがまま放っておき、浜をあとにしました。

携帯の電波もほとんど入らないこの島は、私にとってすごく居心地の良い場所でした。誰かとつながっていないことがうれしかったりします。たまにだから良い。というのは分かっています。でもやっぱり、自然に身を任せるだけの生活が時には大切で、それを心と体が求めている気がします。この感覚は理屈では説明できません。

カケロマでのお話はざっとこんな感じです。榊のおっちゃんとは、人生の先輩として、今後もお世話になっていく予定です。(S.I)

奄美の音楽を包む場のあたたかさ

奄美大島について、私がひとつ魅力を挙げるとすれば、それは、人と人との距離の近さです。シマという海に囲まれた孤立した環境で、ハブなどの危険な生物や台風などの自然の脅威の中で生活をするためには、島民同士の助け合いが不可欠になってきます。それ故に人と人との絆が固いのだと思います。人に親切にしたり、困っている人を助けることが当たり前、として生活に馴染んでいるのだと思います。

私は特に、音楽を通じてその距離感を体験しました。

奄美大島では、皆が音楽に対して親しみを持ち、楽しもうとする心を持っていたように思います。私は、島でバンド演奏する機会がありました。演奏の良し悪しはともかく、聴き手からその演奏を肴にして楽しもうとする意思が伝わってきました。私の住む大阪では、聴き手は「客」として「楽しませてもらう」受身の姿勢が多いのに対し、こちらでは、「仲間」として「一緒に楽しむ」姿勢で音楽に素直に向き合っているように思いました。逆に演奏しているこちらが楽しませてもらう奇妙な体験をしました。

奄美大島の音楽は、「島唄」や「八月踊り」という民謡を体験しましたが、それらは、歌い手と聴き手が区別される形式のものではなく、聴き手も参加して盛り上がることのできる楽しい音楽でした。特に「八月踊り」は、チヂンと呼ばれる太鼓のみを使ってリズムを取りながら人々が取り囲み円になって、手と足を使いひたすら歌い踊り続ける、体力的に厳しいものでしたが、不思議と楽しくなってくる面白いものでした。

また、島のライブハウスに行く機会がありましたが、それは、よくある「ライブハウス」とは少し毛色が違いました。一見バーのようで、店の傍らに演奏するスペースが設けられており、誰でもそこにある機材類を拝借して自由に演奏できるようになっていました。演

奏するための支払いも聴くための支払いも要りません。もちろんタイムテーブルもありません。そこで島唄を歌えば、カウンター裏から合いの手が飛んでくる、そんな開放的な音楽を味わうことができました。

奄美大島は、島民全員が家族であるかのような温かい印象を受けました。都会から移住してくる人が多い、という話を聞きましたが、それも頷けるように思います。(R.K)

奄美エコツーリズムの基本コンセプト

——2010年夏の「アイランド・キャンパス」体験に基づく

2010年9月2日より8日まで、近畿大学文芸学部文化学科現代文化コース・清ゼミは鹿児島県離島振興事業「アイランド・キャンパス」に応募して、「学生自身の体験に基づく奄美エコツアー企画立案」を目的として、奄美大島瀬戸内町に滞在した。以下はその滞在経験から生まれた。その経験を示すため、報告集「私が奄美で体験したこと」からたくさん引用した。

第一部　奄美エコツーリズムの基本コンセプト

■ **「シマ時間」を体験するのが奄美エコツアー**

- これまで「観光」といえば、《有名な歴史的名所や風光明美なスポットを見てまわる》というコンセプトの上に組み立てられてきた。
- われわれが新たに追求しようと思うのは、そうした旧来の「観光」ではない「体験」型のエコツアーである。まずポイントは次の3点である。
  1. たんに「見る」のではなく、「体験」することがポイントだ。「体感する」・「出会う」・「共に遊び、歩き、つくる」を「体験」を産み出す3ポイントとしたい。
  2. 「名所」を「見る」のではなく、「都会」世界とは異なる、別の空気が流れる「自然との共生」世界を、《世界》あるいは《宇宙》として体感することがポイントである。「名所」という個々の形を超えたもっとトータルな、いわく言い難いが確実に感じられる、或る別な《世界》・空気・時間といったものを体感することがポイントである。
  3. 《自然をとおして人に出会い、人をとおして自然に出会う》ということができたときにこそ、「自然との共生」世界を体感できる。
- 以上3点を集約するなら、奄美エコツアーの中心テーマは、《「シマ時間」を体験する》である。「シマ時間」については、報告集「私が奄美で体験したこと」がこんな風に語っている。「この奄美大島に来てすごく時間がゆっくり流れているなと感じました。都会では時間にしばられていたのが、ここにきたら、時間にしばられない生活、これが大きな違いだなと思います。」・「時間の流れ方が早いとか遅いとかではなく、流れ方が静かというか、言葉では表現しづらいのではあるが、都会を流れる空気とは、その密度が違うような気がわたしには感じられた。ただ海辺を散歩しているだけで、イヤホンで耳を塞がずとも、波の音が、風の音がして、飽きさせない。気づけば時間が過ぎている。それを時間を無駄にしたという気持ちにさせない、時間の流れ。」・「私は沖縄旅行に行ったこともあるのですが、沖縄では車のスピードぐらいでしか島のゆっくりした時間を感じることはできません

でした。それはきっと、沖縄には…観光向けの施設が多く、観光客も多いからだと思います。…一方、奄美では…観光客用に整備された施設が少ない代わりに、本州では見られないような自然のありのままの姿を見ることが出来ます。そして、観光客向けのスポットが少ないため、人々も島独特のカラーを残したままであるように感じました。島も人も、変に観光客向けになっていないため、奄美の島自体をそのまま感じることが出来ました。」「自然のエネルギーに負けない生命のエネルギーを持つのが奄美に住む人達です。彼らのその活力の源、それは島が持つ独自の”時間軸”にあるのではないかと考えました。僕達本土の人間が時間を短く短縮して効率よく生きていこうとするのに対して、島の人達は時間の流れに乗るようにして生きているように感じました。生き急いでいる、島の暮らしに身を置いて自分自身の生活を思うとそう感じました。」等々

■ **「シマ時間」に包まれるためにまず星空と出会おう。「夜」の神秘と出会うツアーを考える。**

- ふつう「夜」は観光の対象になりません。たいてい夜は観光では宴会タイムか買い物タイムです。しかし、奄美エコツアーでは「星空」体験・「潮騒」体験を筆頭とする「夜」の神秘と出会うツアー・タイムが不可欠です。
- まずは報告集「私が奄美で体験したこと」から。「私が奄美に来て一番印象に残っていることは、星の数の多さです。私の地元は大阪ですが、建物の明かりや街灯で空が明るく、星がほとんど見えません。奄美に来て最初の夜、空を見上げてびっくりしました。空は真っ暗で360度どこを見ても星があり、視力の悪い私でも星の色やまたたきがみえたからです。加計呂麻島までは流れ星を見ることもでき、本当に貴重な体験ができました。大阪にいるときはあまり空を見ませんが、奄美にいるとついつい空を見てしまいます。それほど都会の人間にとって奄美の星空は魅力的なものなのだと思います。」・「夜の奄美の空いっぱいの星を見ていたら、綺麗という想いだけじゃなく、自然の不思議、生命の不思議について考えさせられました。星空が私にとって一番印象的な奄美の景色です。時間に縛られて生活していると視野が狭くなりがちですが、奄美でののんびりした時間では視野が広がります。普段の生活では大きく思えた悩み事も、大きな自然を感じていると小さなものに思えてきます。」「夜のメインイベントが、徳浜の海辺で、星空の下テントをはって寝る。というものでした。なんとも見事な三百六十度星まみれ。『まみれ』という言葉はあまり良い感じがしないので、満天の星空と言いましょう。流れ星もたくさん見ました。波の音と、キラキラと星で埋め尽くされた空、あの空間は一生忘れません。」
- 満天の星空の下、宇宙の闇に包まれた浜辺に降りて、潮騒に包まれていると、海の巨大さと天の巨大さが潮騒となって私を包むという体感を得ます。星空体験だけでなく潮騒体験も欠かせないとはみんなの意見でした。
- 「夜」の本当の漆黒の闇もまた奄美ならでの体験です。ほんとうに真っ暗な怖い夜に出会えるのも奄美の魅力です。
- 夜の浜辺では「海ホタル」（夜光虫）にも出会えました。瀬戸内観光協会の観光コーディネーターの金沢充啓さんによれば、夜にモーターボートを繰り出して、船尾に竹箒をつけて走ると、それはそれは美しい夜光虫の光の輪が楽しめるそうです。これもぜひ体験できるように企画したい。

- 奄美のクロウサギに出会うことができるのも夜です。夜にはフクロウを鳴きますし、カエルの鳴き声はあたりじゅう響いています。
- シマの人たちと相談して、奄美の「夜」の神秘に出会うツアータイムの企画を豊かに練り上げたい。そのために、観光コーディネーターの金沢さんや、「奄美の自然を考える会」・「奄美の野鳥の会」等の自然観察・保護団体の人々、そして集落の人々にも参加いただき共同の企画会などをもち、いくつかのプランとそれを保障する人的ネットワークを立ち上げたい。

■ **「シマ時間」に包まれるために海をトータルに体感しよう。そのためのガイドライン的マニュアルを、シマの人々、とくにシマの青年たちと共同でつくりたい。**

- **水泳用ゴーグルで十分できる海中探訪ガイド**（推薦の浜、その浜で見ることができる稚魚・ヤドカリ・ウミガメ、等の情報、潮の満ち引きに関する情報）
- **磯遊びガイド**（磯の生物とその面白い生態についてのガイド）
- **海釣り体験**は、海の大きさをゆったり体験し、南島の魚の美しさに出会い、釣りの面白さを体験するうえで欠かせない。学生料金で海釣り体験ができるネットワークを立ち上げたい。（これは既に瀬戸内町清水の民宿ユートピアがやっている）
- **浜で貝殻を拾う**楽しさと、**拾った貝殻でちょっとしたアクセサリー**やおしゃれな小物（貝細工で装飾した小箱、網バッグ、等）を作る楽しみを連結するネットワーク上の工夫。（これは既に瀬戸内町清水の民宿ユートピアがやっている）
- **台風余波などで海が荒れた時**、そのときこそ海の恐ろしいエネルギーを体感できる得難い機会だと、十分用心しながらも浜に荒れる海を見に行こう。報告集「私が奄美で体験したこと」から。「空は雲で隠れ風が肌を押し出すかのように吹き寄せる。海は荒れ波が押し寄せ青をにごらせ山の緑を包むかの勢いでした。つまりは嵐、……自然のことは運任せでついてないと思う反面、人の思考や感情をものともしない暴れるような嵐に改めて自然のエネルギーをこの身に感じました。美しい自然、そんな当たり前な言葉の現実とはまさに諸刃の刃で、青い空はスコールを呼び心地よい波音が船をも飲み込む悪魔へと変わり、心やすらぐ山の緑がハブやイノシシといった人外の脅威を生み出す、のどかな島の暮らしは自然に支えられている反面自然との闘いであると思いました。」・「塩工房のそばの海は悪天候で荒れ、以前見た穏やかで青くキレイなものとは違う姿をしていました。空は暗く、風は強く、波は高く激しく、すさまじい勢いでこっちにどんどん迫ってきます。自然の驚異というものを肌で感じました。心臓の奥がぎゅっと怖がっているのが分かりました。」・
- **海に落ちる夕陽を見る**。於斉の区長さんは、於斉から車で 10 分ぐらいのところに絶景の夕陽スポットがあるから、今度来た時は、そこにいけるように於斉の人々の協力――車移動のための――を組織してあげるといってくださいました。海釣りの帰りに夕陽が海に落ちかけていました。とてもよかったので、夕陽鑑賞堪能はぜひ今度実現させたいです。

■ **「シマ時間」に包まれるために「生き物との出会い」ツアータイムを企画しよう**

- まず報告集「私が奄美で体験したこと」からの問題提起：「奄美大島では、都会では決して見ることのできないありのままの自然を見ることができます。……その中で私が特に驚いたのは様々な生き物と出会えることです。海では白、黒、青、

黄など、色とりどりの魚が泳いでおり、浜辺ではカニやヤドカリがせわしなく動いていました。また、山では、不気味な色をした蝶や蛾がヒラヒラと舞い、カラフルな日本トカゲや絶滅危惧種とされている木登りトカゲも見ることができました。都会に住んでいると図鑑でしか見ることのできない生き物を実際にこの目で見ることができることが奄美大島の魅力だと私は思います。……奄美大島のエコツアーを企画するのなら、生き物と触れ合うことのできるようなイベントを盛り込んでみるときっと面白いと思います。」

- 「生き物との出会い」ツアータイムを実施することが同時に奄美の青年や老人との人間的な出会いの機会でもあるように、うまく自然との出会いと人との出会いを組み合わせるという原則を立てて、この企画を追求したい。
- 「生き物との出会い」ガイドがいたら、このツアーはいっそう面白くなるはず。
  1. 鳥ガイド
  2. 昆虫ガイド
  3. 爬虫類ガイド
  4. 薬草ガイド
  5. ハーブガイド
  6. 花と果実と野菜ガイド、等々がいたら、それを集落の人々のなかで得意な人がやってくれたらとてもいい。

■ **「シマ時間」に包まれるために、シマ時間を生きている面白人間に出会う。**

- この 2010「アイランドキャンパス」では、清ゼミは 9 月 3 日に奄美の面白人間に会いに行く（奄美のブッシュマン里さん、民宿ユートピアに賭ける円山さん、陶芸喫茶店コンブチの藤井さん、釣り人生の実現のため東京から移り住んだ三井さん）という出会い体験企画に取り組みました。藤井ゼミはそれぞれいろんなシマの人に聞書き調査に入りました)。
- 報告集「私が奄美で体験したこと」から：「民宿ユートピアの主人、円山さんに自身が経営している養鶏場について話を聞かせてもらった。彼は公務員の三年の定年を残して民宿を始めたわけだが、民宿だけでは自給自足に苦しむそうだ。そこで養鶏場を建設し、アヒル、チャボ、ニワトリ、ドラゴンフルーツ、バナナ、パパイヤなどを育て、収穫した卵やフルーツを売ることでそれを副業として生計を立てているそうだ。奄美大島のような自然に溢れた土地で、“何をできるのか”ということを考えながら知恵を絞って生活しているのだなあと感心せざるを得なかった。」・「この喫茶店は大阪のものとは少し違うのです。音楽が流れていなくて、マスターとの会話や窓のそとの風景をながめたり、とても静かで自分を見つめ直したり、考え事をするのに最適でした。」・「奄美に住んでいる方からお話を聞く機会がたくさんありました。お宅に訪問させていただいたり、講演をしにきていただいたり、また、いろんな場で出会った方々がすごく気さくに話しかけてくれたりもしました。そういったなかで、奄美の人はすごく温かいなということを感じました。……奄美の人々は、八月踊りなどの行事ではみんな一緒に踊って楽しみ、何かあれば近所どうしで助け合う、というように、本当に人と人との関わりあいを大切にしているんだなと感じました。……わたしたちが大阪での生活と比べると、やっぱり不便なんじゃないかなと感じることも、奄美の人たちは、ないものは自分たちで作っていく、自分たちの力で暮らしていく、というふうに、すごく

それを楽しみながら奄美で暮らしているんだなと感じました。だから、これから奄美を訪れる人には、きれいな海や星、自然を感じてほしいし、奄美の人とたくさん会って、たくさん話す機会を作ってほしいなと思います。」・「★島の人：困っているとすぐ助けてくれる島の人、榊さんや里さんの親しみやすさ、円山さんの熱さ、奥さんの優しさ、　島の若い人たちのノリのよさ、よそ者(私たち)をありのままに受け入れてくれる、みんな奄美のことが好き、第二の人生を送る人が多い」

- この出会いを確実にできるようにするためには、事前の根回しと計画がまずしっかり立てられている必要がある。奄美にはたくさん面白い奄美人がいるから、ちゃんと企画すれば必ず面白い企画ができる。

■ シマ唄・八月踊り・ライブハウスで一緒に楽しむことで「シマ時間」の人間的基盤を体感する

- 報告集「私が奄美で体験したこと」から：「まず、島人が住む奄美の魅力を私が感じた視点から３つ項目を上げ、振り返りたいと思います。①八月踊りの期間はその半分を踊りに費やす位、踊りを愛してやまない奄美の人々は“踊り”という文化を通じて自然と人と人との心もつないできたのではないか。②島唄文化が強い土地柄もあり、島人皆歌が上手い人達ばかりだなぁと感じた。③困っている人を決して見放さない人々の温かさに触れることが出来た。この３つが島人と出会い、話をしたりする中で私が感じた奄美の魅力でした。……いろんな離島ならではの困難さがありながらも、島人が楽しく暮らしている様に感じ取れるのは、根本に島の人の温かさと、助け合う気持ちを皆が持っているからこそだと強く感じました。」「奄美大島では、皆が音楽に対して親しみを持ち、楽しもうとする心を持っていたように思います。私は、島でバンド演奏する機会がありました。演奏の良し悪しはともかく、聴き手からその演奏を肴にして楽しもうとする意思が伝わってきました。私の住む大阪では、聴き手は「客」として「楽しませてもらう」受身の姿勢が多いのに対し、こちらでは、「仲間」として「一緒に楽しむ」姿勢で音楽に素直に向き合っているように思いました。逆に演奏しているこちらが楽しませてもらう奇妙な体験をしました。奄美大島の音楽は、「島唄」や「八月踊り」という民謡を体験しましたが、それらは、歌い手と聴き手が区別される形式のものではなく、聴き手も参加して盛り上がることのできる楽しい音楽でした。特に「八月踊り」は、チヂンと呼ばれる太鼓のみを使ってリズムを取りながら人々が取り囲み円になって、手と足を使いひたすら歌い踊り続ける、体力的に厳しいものでしたが、不思議と楽しくなってくる面白いものでした。また、島のライブハウスに行く機会がありましたが、それは、よくある「ライブハウス」とは少し毛色が違いました。一見バーのようで、店の傍らに演奏するスペースが設けられており、誰でもそこにある機材類を拝借して自由に演奏できるようになっていました。演奏するための支払いも聴くための支払いも要りません。もちろんタイムテーブルもありません。そこで島唄を歌えば、カウンター裏から合いの手が飛んでくる、そんな開放的な音楽を味わうことができました。」
- 2010年の「アイランド・キャンパス」では、９月４日のバーベキュー交流会で３人の方の掛け合いによるシマ唄を堪能。交流相手の青年たちと六調を一緒に踊る。９月５日に古仁屋のライブハウス「マッチボックス」で経営者の大輔さんと一緒にライブをする。９月６日に古仁屋八月踊り芸能保存会の富島甫さんの講演、その後保存会の人たちと一緒に八月踊りを踊る、というような音楽芸能体験を積み重ねることができた。
- 奄美のシマ唄・八月踊り・六調（踊り）等は、多くの困難を抱えながらも、それに負けずに奄美の人々が元気よく生きてこれた魂の活力源である。だからそこに奄美の人々の魂がこもって

いる。それに直に触れ、一緒に歌い踊る楽しみを体感することなしには、「シマ時間」は体感できない。

■ **台風余波など、雨天の場合のツアータイムの過ごし方を事前にきちんと準備しておく**

● 奄美を台風がとおらなくなったとはいえ、台風余波などで雨天に出会う可能性は多い。だから魅力的な代替プランは必須である。「今回は台風の影響で雨の日に何日かぶつかってしまいました。雨の日用のプランも考えておく必要を痛感しました。具体的な案としては、芸術コースの人達がユートピアの方に教わりながら、貝殻などを使って写真立てをデコレーションしていたので、それなら雨の日でもでき、民宿の方とも親睦を深めることができるのでよいのではないかと思っています。またカフェこんぶち横の陶芸教室に参加するのもよいのではないでしょうか。」（報告集「私が奄美で体験したこと」から）

① 貝殻によるアクセサリーや装飾小物づくり
② 簡易陶芸教室
③ 人物訪問
④ シマ料理づくり体験
⑤ シマ唄・八月踊り・六調体験
等が考えられる

■ **瀬戸内町企画課ならびに観光課への提言**

都会に暮らす現代の青年を奄美に引きつけ、長期滞在型のエコツアー体験を彼らに堪能してもらうためには最低限次の施設改善を町役場がイニシアティヴをとって、各集落と協力し合っておこなうべきだと思います。

① エコツアーのための拠点となる公民館のトイレを水洗式のものへ改造する。男女別々の二つのトイレを設置する。
② エコツアーのための拠点となる公民館に温水式のシャワー設備をつける。最小限、男女別々二つのシャワー室をつくる。
③ 瀬戸内町町役場を仲介にして、エコツアー旅行者がレンタル自転車を利用できるように、夏期間だけでも総数３０台ぐらいとなる利用システムを整備する。（たとえば、生間と瀬相に各 10 台、古仁屋に 10 台、分散しておき、場合によってはそれを集合させて大人数となった利用者に対応するとか）